

穂村弘、十七年ぶりの歌集 加古陽

「歌人」とは何か。卓上の『岩波現代短歌辞典』で調べたら、なんと項目がなかった。それではと、電子辞書の『デジタル大辞泉』を見たら「和歌を詠む人。また、それを職業とする人。歌詠み」とある。現代歌人の定義で「和歌」がヘンなのはさておき、「職業とする人」も少ないだろう。ましてや一般の人までが新作歌集を待ち望む人となると、いったい誰が当てはまるといふのか。

その数少ない一人が穂村弘だ。最後に歌集（東直子との共著『回転ドアは、順番に』）を出したのは十五年も前のこと。単独の新作歌集となると、十七年前の『手紙魔まみ、夏の引越し（ウサギ連れ）』にまでさかのぼる。おそろしく寡作だ。この間、毎年のようにエッセイ集を出し、世間ではおもしろエッセイストとして知られている。十分に名声は得たし、もしかしたらもう歌集は出ないのかも、とあきらめかけていたところに、新作刊行のニュースが入った。

短歌総合誌などに寄せた連作を再構築して編んだ歌集『水中翼船炎上中』講談社だ。「出発」から「水中翼船炎上中」までの十一の作品群は、連作小説の趣がある。巻頭の「出発」には、「自転車車のベルがふたりを映しだす夜の百万遍交差点といった相聞歌もあれば、へ電車の中でもセックスをせよ戦争へゆくのはきつと君たちだから」といったラディカルな社会詠もある。人に言えない願望を爆発させたへ金ならもつてるんだ金なら真夜中に裸で入るセブイレブンを、不思議な映像の世界を醸し出すへ冷蔵庫のドアというドアばらばらに

開かれている聖なる夜に」なども、小さなアイデアの種火から驚異を導きだす、いつもの穂村ワールドだ。

ところが、次の「楽しい一日」に入り、違和感が急速に広がる。そこは、かつての『シンジケート』で見られた、切れ味鋭い若者の才気ではなく、子供に退行した稚氣に包まれた世界だったからだ。「共感」より「驚異」と語り続けてきた穂村が、なぜ子供の眼で昭和の世界を描こうとしたのか。この連作にもへ友だちの顔を粘土で作りましよう窓の外には燃える向日葵」といった驚異志向の歌を織り交ぜているとはいえ、ここまで読む限りでは謎だ。

「につぼんのクリスマス」「水道水」も、へひまわりの顔からアリアがあふれてる漏斗のようなおおぞらの底」など驚異志向の歌があるものの、基本は子供退行路線だ。だが読み進むと、それが後の伏線となっていて、ことが分かりはじめる。長い、長い導火線だ。

「水道水」の中にへ夜ママとおまわりさんが話してるサランラップの中の赤飯という歌がある。これが、終盤の「家族の旅」のへちちはが微笑みあつてお互いをサランラップにくるみはじめると、闇のなかうすめあければきらきらとサランラップの父母のきらめき×サランラップにくるまれたちははがきらきらきらきらセックスをするへとつながってゆく。サランラップは透き通っているが、同時に隔てるものだ。そのイメージがどんどん肥大化し、父と母は子から遠ざかってゆく。その行きつくところは死だ。果たして歌集の終盤、亡き母への挽歌を連ねた「火星探検」が現れる。つまり、子供退行路線はそこに至る伏線だったのだ。

歌集の核心は「永遠のひとり息子」が描いた昭和の家族の姿にある。十七年ぶりの歌集としてそれは私の勝手な期待とは違っていたが、自己模倣を避けるという意味でも必然の通過点だったのかもしれない。